二〇二二年度 大学入学共通テスト 解説〈古典〉

第3問 古文 『増鏡』『とはずがたり』

［出 典］

『**増鏡**』は、南北朝時代に成立した**歴史物語**。いわゆる**四鏡**・**鏡物**と言われる作品（『**大鏡**』・『**今鏡**』・『**水鏡**』・『**増鏡**』）の一つである。作者は、二条良基説などがあるが未詳。内容は、ほぼ**鎌倉時代全史**と言えるもので、後鳥羽天皇誕生（一一八〇年）から、元弘の乱による鎌倉幕府滅亡（一三三三年）までの約一五〇年の歴史を**編年体**で記している。なお、歴史物語では、**四鏡**の他に、『**栄花物語**』（二〇二一年度「大学入学共通テスト」で出題された）も知っておきたい。

一方、『**とはずがたり**』は、鎌倉時代後期に成立したと見られる**日記・紀行**。作者は、後深草院に親しく仕えた女房で、**後深草院二条**と呼ばれる女性である。前半は、院の御所に仕えていた時の生活を、後半は、出家して東国・西国を行脚したことなど、修行時代の生活を描いている。

『**とはずがたり**』が、『**増鏡**』編述の資料の一つとなっていることは、今回の問題に見られるとおりである。今回の問題では、**【文章Ⅰ】**『**増鏡**』の冒頭の「**院も我が御方にかへりて**」が、**【文章Ⅱ】**『**とはずがたり**』の六行目「**我が御方へ入らせ給ひて**」に相当する表現（いずれも後深草院が自室へ戻ることを意味する）となっており、**【文章Ⅰ】**が**【文章Ⅱ】**六行目以降を踏まえて書かれていることがわかる。

［通 釈］

【文章Ⅰ】『増鏡』

院［＝後深草院］も、ご自分の御部屋に戻って、お休みになったけれど、お眠りになることができない。先ほどの（斎宮の）御姿が、気にかかって思われなさり、実にどうにもならない。「わざわざ（こちらから恋しい気持ちを）申し上げるようなことも、人聞きがよろしくないだろう。どうしよう」と思い乱れなさる。御兄妹［※ 斎宮が院の異母妹であることは前書き参照］とはいっても、長年離れて育ちなさったので、常々疎遠になりきっていらっしゃるままに、（妹に恋心をもつことが）遠慮される御気持ちも薄くなったのだろうか、やはり（斎宮への思いが遂げられず）ただただ悶々とした気持ちのまま終わってしまうようなことは、不満で残念だとお思いになる。よろしくない御性質であるよ。

某大納言の娘で、（院の）御身辺近くに仕える者であり、例の斎宮にも、しかるべき縁があって、親しく参上し慣れている者［＝二条］を（院は）お呼びになって、「（斎宮とは）深い関係を結ぼうとまでは思っていない。ただ少し（斎宮に）近い場所で、思いのたけの片端でも申し上げたい。（斎宮に近づくには）このようによい機会も本当に得がたいことだろう」と、しきりに本気でおっしゃるので、（二条は）どのように工夫したのだろうか、夢とも現実とも判然としないようなうちに（院は斎宮に）近づき申し上げなさったので、（斎宮は）たいそうつらいとお思いにはなったけれど、（かと言って）弱々しく死にそうなほどにあわてなさるということなどもない。

【文章Ⅱ】『とはずがたり』

斎宮は二十歳余りにおなりになる。成熟した御様子は（あまりにも素晴らしく）、（伊勢神宮の）神が名残惜しく心ひかれて（斎宮を伊勢に）とどめなさったというのももっともなことであり、花ならば、桜にたとえたとしても、はた目にはどうであろうかと［＝人であろうか花であろうかと］つい見間違えてしまうほど（の美しさ）で、桜の花を霞が隠すように顔を袖で隠す［※男性が袖を重ねて斎宮に迫る意とする説もある］間にも、どうしたらよいかと思い悩んでしまいそうな（恥じらいのあるかわいらしい）御様子であるので、ましてあまねく女性を求める（院の）好色な御心の内では、早くも（斎宮が）どのような（恋の）物思いの種になっていることかと、はたからもお気の毒に思われなさった。

（院と斎宮とは）お話をなさって、（斎宮は、伊勢神宮の）神路の山のお話［＝伊勢神宮に奉仕していた頃の思い出話］などを、途切れ途切れに申し上げなさり、

（一方、院は）「今夜はたいそう夜が更けました。のんびりと、明日は嵐山［＝京都市西部にある、紅葉や桜で有名な山］の落葉した木々の梢でも御覧になって、お帰りください」

などと申し上げなさって、ご自分の御部屋へお入りになるが、すると早くも、

「（斎宮への思いを遂げるには）どうしたらよいか、どうしたらよいか」

とおっしゃる。（やはり）思ったとおりだよと、（私が）おもしろく思っていると、

（院は）「幼い頃から（私の側近くに）仕えてきたことの（誠実さの）証明に、このこと［＝斎宮に恋心を抱いていること］を（斎宮に）申し上げて（私の望みを）かなえてくれたら、（おまえに）本当に（私に対する）愛情があると信じよう」

などとおっしゃるので、（私は）すぐに御使者として（斎宮のもとへ）参上する。（御口上は）ただありふれた挨拶で、「御対面できてうれしゅうございます、旅先での御宿泊はつまらなくはございませんか」などというもので、（院からの）ひそかな御手紙がある。（紙は）氷襲の薄様［＝薄く漉いた上質な紙］であったろうか、（書かれていた院の歌は、）

「知られじな…＝（あなたは）ご存じないでしょうね。たった今拝見した（あなたの）姿がそのまま気にかかって（私の）心から離れなくなったとは」

夜が更けてしまったので、（斎宮の）御前に仕える女房も皆、物にもたれかかって寝てしまっていた。御主人［＝斎宮］も小さな几帳を引き寄せて、（その陰で）お休みになっていた。近寄って、（私が斎宮に）事の様子を申し上げると、（斎宮は）御顔を赤らめなさって、格別ものもおっしゃらず、手紙も見るでもなく、お置きになった。

「（院には）何と申し上げましょうか」

と（私が）申し上げると、

（斎宮は）「思いも寄らない（院の）御言葉には、何とも（お答えの）申しようもなくて」

とだけおっしゃって、再びお休みになってしまわれた。それ［＝寝ているのにそれ以上申し上げること］も気がとがめるので、（私は院のもとへ）帰り申し上げて、このことを御報告申し上げる。

（院は）「とにかく、（斎宮が）寝ていらっしゃるような所へ案内せよ、案内せよ」

と（私を）お責めになる。そのように責められるのも面倒であり、御供をして（斎宮のもとへ）参るようなことはたやすいことなので、（院を）案内をして（斎宮のもとへ）参上する。（院は、）甘の御召し物［＝院が平服として着用する直衣］などは大げさなので、御大口［＝束帯の時に身につける下袴姿］だけで、こっそり（斎宮の御部屋に）お入りになる。

まず（私が）先に参上して、御障子［＝襖］をそっと開けたところ、（斎宮は）先ほどの御様子のままでお休みになっている。（斎宮の）御前に仕える女房も寝入ってしまったのであろうか、音を立てる者もなく、（院は）体を縮めて小さくして、這うようにして（室内に）お入りになったが、その後、（お二人には）どのようなことがおありになったのだろうか。

［解　説］

問1　語句解釈の問題

重要単語・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意も踏まえて解答したい。

短い語句の意味を問う設問は、「センター試験」でも毎年度**問1**で出題されてきたが、試行調査（プレテスト）や昨年度の「大学入学共通テスト」でもひき続き出題があり、本年度も出題された。

(ア)

基礎

「まどろまれ給はず」の解釈として最も適当なものを選べ。

「まどろま／れ／給は／ず」と単語分けされる。

「**まどろま**」は、動詞「まどろむ」の未然形。「まどろむ」は、現在でも使うことのある語で、「浅く眠る・うとうととする」の意である。これが正しく訳されているのは②のみ。これで**正解**は②に決定する。

「**れ**」は、可能（＝～できる）の助動詞「る」の連用形。助動詞「る」は、受身・自発・尊敬の意を示すこともあるが、ここのように、否定文内で使われている場合には可能を示すことが多い。また、「給ふ」の直前にある場合には、尊敬であることはなく、尊敬以外の意味を示す。「**れ**」が正しく訳されているのも②のみ。「**給は**」は、「お～になる・～なさる」などと訳す尊敬の補助動詞「給ふ」の未然形。「**ず**」は、打消の助動詞終止形である。

よって、**正解**は②である。

正解　20　②　（5点）

(イ)

基礎

「ねびととのひたる」の解釈として最も適当なものを選べ。

「ねび／ととのひ／たる」と単語分けされる。

「**ねび**」は、「（心身ともに）成熟する・大人びる」の意の動詞「ねぶ」の連用形。これが正しく訳されているのは②のみ。これで**正解**は②に決定する。

「**ととのひ**」は、動詞「ととのふ（調ふ・整ふ）」の連用形。現代語の「調う・整う」と同じく「不足なくそろっている・まとまっている・できあがっている」といった意味で、ここでは「**ねびととのひ**」で「成熟する」ことを意味している。「**たる**」は、完了（＝～た）・存続（＝～ている）の助動詞「たり」の連体形で、これが正しく訳されているのは②・③・④である。

よって、**正解**は②である。

正解　21　②　（5点）

(ウ)

基礎

「おほかたなるやうに」の解釈として最も適当なものを選べ。

「おほかたなる／やうに」と単語分けされる。

「**おほかたなる**」は、形容動詞「おほかたなり」の連体形。「おほかたなり」は、現在でも「おおかたの人は賛成している」「作品はおおかた完成した」「おおかたの評判」のように使われることでわかるように、「大体・おおよそ」、または「一般」の意である。「全体のうちの大部分」、もしくは「特殊でなく普通」であることを表す語であるから、これに相当する意味が読み取れるのは、③の「ありふれた」だけである。これで**正解**は③に決定する。

「**やうに**」は、名詞「やう（様）」と断定の助動詞「なり」が一語化した語（助動詞として扱うこともある）「やうなり（＝ようだ）」の連用形で、そのまま「ように」と訳せばよいが、これはどの選択肢でも直訳はしていないので、これで選択肢を絞ることはできない。傍線部、及び、傍線部に続く箇所では、作者（二条）が「院」の「**御使**（＝使者）」として「斎宮」のもとへ行った時に、「**御対面うれしく。御旅寝すさまじくや**（＝御対面できてうれしゅうございます、旅先での御宿泊はつまらなくはございませんか）」という口上を述べることを頼まれたことが述べられているが、傍線部「**おほかたなるやうに**」は、その口上がどのようなものであったかを説明しているのである。よって、そのことを踏まえると、「**やうに**」の部分の訳は、①の「～な感じで」、③の「～挨拶で」（口上は斎宮への挨拶である）が、スムーズに次につながることになるが、①は「**おほかたなる**」の訳が真逆の「特別な」になっているので正しくない。

以上から、**正解**は③である。

正解　22　③　（5点）

問2　傍線部の語句・表現に関する説明問題　応用

傍線部A「つつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせくてやみなむは、あかず口惜しと思す」の語句や表現に関する説明として最も適当なものを選べ。

一箇所の傍線部に関して、語句・表現・内容等、多方面から問う問題で、「大学入学共通テスト」になって出題されるようになった**新傾向**の問題。試行調査（プレテスト）や昨年度の「大学入学共通テスト」でも出題があり、本年度も出題された。「センター試験」では毎年問2で問われていた**文法・敬語**は、今後はこの問題に含まれて問われることになる可能性がある。

傍線部は、「つつましき／御思ひ／も／薄く／や／あり／けむ、／なほ／ひたぶるに／いぶせく／て／やみ／な／む／は、／あか／ず／口惜し／と／思す」と単語分けされ、「遠慮される御気持ちも薄くなったのだろうか、やはりただただ悶々とした気持ちのまま終わってしまうようなことは、不満で残念だとお思いになる」という意味である。

① **「つつましき」**は、「遠慮される・気恥ずかしい」などと訳す形容詞「つつまし」の連体形。**「や」**は、疑問（＝～か）の係助詞。**「けむ」**は、過去推量の助動詞「けむ」の連体形（係助詞「や」による係り結びの結び）である。**「つつましき御思ひも薄くやありけむ」**は「遠慮される御気持ちも薄くなったのだろうか」という意味であることになるが、直前の**「御はらからといへど、年月よそにて生ひたち給へれば、うとうとしくならひ給へるままに**（＝御兄妹とはいっても、長年離れて育ちなさったので、常々疎遠になりきっていらっしゃるままに）」からのつながりで考えると、ここで言っている**「つつましき御思ひ**（＝遠慮される御気持ち）」とは、兄妹間で恋愛の感情を持つことである。身近で一緒に育てば、兄が妹に恋慕することが**「つつましき」**ことであることは当然わかるはずなのに、「院」と「斎宮」は離れて育ったので、妹に対する恋慕が**「つつましき」**ことであるという**「御思ひ」**も薄れてしまっていたのだろうか、と作者（語り手）が推量しているのである。よって、**「つつましき御思ひ」**を、「院と久しぶりに対面して、気恥ずかしく思っている斎宮の気持ち」と説明している①は正しくない。

② ①で見たように、**「けむ」**は過去推量の助動詞ではあるが、**「つつましき御思ひも薄くやありけむ」**は「遠慮される御気持ちも薄くなったのだろうか」という意味であり、作者（語り手）が当時の「院」の状態を推量しているのであるから、②の「対面したときの斎宮の心中を院が想像している」という説明は正しくない。

③ **「いぶせく」**は、「気が晴れない・うっとうしい・不快だ」などと訳す形容詞「いぶせし」の連用形。**「やみ」**は、「それきりになる・終わる」などと訳す動詞「やむ（止む）」の連用形。**「なむ」**は、連用形に接続しているので、完了（＝～てしまう）・強意（＝きっと・必ず）の助動詞「ぬ」

の未然形「な」に、婉曲（～ような）・仮定（＝～ならば）の助動詞「む」が接続している状態である。「**なほひたぶるにいぶせくてやみなむは**」は「やはりひたすら気が晴れなくて終わってしまうようなことは」と直訳されることになるが、要は、「斎宮への思いをとげることができずに悶々とした気持ちのまま気が晴れないことになってしまったら」ということである。よって、③の説明は正しいことになる。

④　③で見たように、「**やみなむ**」の「**む**」は婉曲（～ような）・仮定（＝～ならば）の助動詞である。助動詞「む」は、推量（＝～だろう）・意志（＝～しよう）等の意味を示すこともあるが、ここのように連体形である場合はほとんどの場合に婉曲・仮定である。助動詞「む」は、終止形も連体形も「む」であるが、「**やみなむ**」の「**む**」は文末ではないから、終止形ではなく、連体形である。よって、この「**む**」は婉曲・仮定であり、④の「意志の意味」という説明は正しくないことになる。また、「**やみなむ**」は「斎宮への思いをとげることができずに悶々とした気持ちのまま終わってしまうような」という意味で、「院」の気持ちを言っているのであるから、④の「院が言い寄ってくるのをかわそうという斎宮の気持ちを表している」という説明も誤りである。

⑤　「**あかず**（**飽かず**）」は「もの足りない・名残惜しい・満足できない」などと訳す表現であり、「**口惜し**」は「残念だ」と訳す形容詞であるから、⑤の「不満で残念だという意味」という説明は正しいが、③で見たように、これは、「**いぶせくてやみなむ**（＝斎宮への思いをとげることができずに悶々とした気持ちのままで終わってしまうような）」ことになったら、という仮定のもとでの気持ちを言っているのである。⑤が言うように、この時点での「斎宮の態度を物足りなく思っている」という意味ではない。

よって、**正解**は③である。

正解　23　③　（7点）

問3　内容説明問題　標準

傍線部**B**「せちにまめだちてのたまへば」とあるが、このときの院の言動についての説明として最も適当なものを選べ。

傍線部は「せちに／まめだち／て／のたまへ／ば」と単語分けされ、「しきりに本気でおっしゃるので」という意味である。

「**せちに**」は、形容動詞「せちなり」の連用形。「せち」には「切」の字が当たり、「切実な状態・切迫した状態」を示し、「ひたすらだ・しきりだ・切実だ」などと訳す語である。「**まめだち**」は、「まじめにふるまう・本気になる」の意の動詞「まめだつ」の連用形。「まじめだ・誠実だ」の意の形

容動詞「まめなり」「まめやかなり」、同意の形容詞「まめまめし」などを知っているならば、そこから派生した動詞と考えればよい。「**のたまへ**」は、「おっしゃる」と訳す動詞「のたまふ」の已然形である。

つまり、ここで「院」は「**なれなれしきまで…**」（傍線部Bの直前）という言葉を、「**せちに**（＝しきりに・切実に・切迫した状態で）」、また、「**まめだちて**（＝本気で・大まじめに）」言っているのである。選択肢の中でこの「院」の態度を正しく説明しているのは、「**せちに**」に関しては、①の「必死さ」、④の「一気に事を進めようとしている・性急さ」、また、「**まめだちて**」に関しては、③の「誠実さ」であることになる。

また、その「院」の言葉「**なれなれしきまでは思ひ寄らず。ただ少しけ近き程にて、思ふ心の片端を聞こえむ。かく折よき事もいと難かるべし**」は、「（斎宮とは）深い関係を結ぼうとまでは思っていない。ただ少し（斎宮に）近い場所で、思いのたけの片端でも申し上げたい。（斎宮に近づくには）このようによい機会も本当に得がたいことだろう」という意味である。「恋心を手紙で伝えることをはばかる言葉」（②）ではなく、「自分と親密な関係になることが斎宮の利益にもなる」（⑤）と言っているわけでもない。「**なれなれしきまでは思ひ寄らず**（＝深い関係を結ぼうとまでは思っていない）」とは言っているが、実際には、この後「二条」に手引きをさせて「斎宮」のもとへ行ったのであるから、これはうわべだけの言い方であり、ここに③が言うような「斎宮に対する院の誠実さ」が表れているとは言いがたい。一方、「**かく折よき事もいと難かるべし**（＝このようによい機会も本当に得がたいことだろう）」は、④が言うように「この機会を逃してはなるまい」という「院」の気持ちの表れであると言えるので、④の説明には誤りがないことになる。なお、「二条」はもともと「**かの斎宮にも、さるべきゆかりありて睦ましく参りなるる**（＝例の斎宮にも、しかるべき縁があって、親しく参上し慣れている者）」（**【文章Ⅰ】**5行目）である。①が言うように、「院」がこの場面で「二条と斎宮を親しくさせ」ようとしている事実はない。

よって、**正解**は④である。

正解　24　④　（7点）

問4　二つの文章を踏まえた教師・生徒の発言に関する空欄補充問題

次に示すのは、授業で**【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】**を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読み、後の(i)～(iii)の問いに答えよ。

同じ事柄を描いている**二つの文章の、描き方の相違点**を考えさせる問題は新傾向の問題。また、**複数の人物（教師・生徒など）の会話に関する問題**

は、試行調査等で出題があったが、本番の「大学入学共通テスト」の古文の問題では初めての出題である。

(i)

空欄 X に入る最も適当なものを選べ。　**標準**

空欄の前に「院の様子なんかそうかも。**【文章Ⅱ】**では」と書かれているとおり、X では、**【文章Ⅱ】**での「院の様子」の描かれ方が説明されているはずである。

① 「発言中で同じ言葉を繰り返している」と説明しているのは、7行目「**いかがすべき、いかがすべき**」や、19行目「**導け、導け**」のことであり、前者は「(斎宮への思いを遂げるには) どうしたらよいか、どうしたらよいか」、後者は「(斎宮が寝ている所へ) 案内せよ、案内せよ」という意味であるから、①が言うように「いてもたってもいられない院の様子」を表していると言える。よって、説明に誤りはない。

② まずは「葛藤」が誤り。「葛藤」とは「相反する感情のいずれをとるかで思い悩む」ことだが、「院」の「斎宮」に対する思いは、一心不乱とも言える恋心であり、踏みとどまろうとか、「斎宮」の気持ちを思いやろうとかいう、「恋心」と相反する感情との葛藤は見られない。また、「二条との会話」は、7行目、9行目、19行目にあるが、それらからは、「斎宮」への思いをどうすればかなえられるか、また、なんとしてもかなえたいという、熱心な「院」の思いが読み取れるが、この「恋心」は、初めから非常に熱心なものとして描かれており、「次第に」深まっていっている様子はない。

③ ②で見たように、「院」には「斎宮の気持ちを繰り返し思いやっている」様子はない。

④ 「斎宮から期待通りの返事をもらった」という事実がない。14～18行目によれば、「斎宮」は「院」の手紙を見ることもなく、返事もしなかったのである。また、20・21行目によれば「院」は、「**甘の御衣**」では「**ことごとしけれ**（＝大げさだ）」ということで、簡素な「**御大口**」姿で「斎宮」のもとへ出かけたのである。簡素な服装で出かけたことに「心躍る様子」が表れているとは考えられない。

よって、**正解**は①である。

正解　25　①　（7点）

(ii)

空欄 Y に入る最も適当なものを選べ。　**標準**

空欄の直前に「二条のコメントが多いところも特徴的だよね。**【文章Ⅱ】**の」と書かれているように、**Y**には、**【文章Ⅱ】**での「二条のコメント」に関する説明が入ることになる。

① 1・2行目では、「斎宮」がいかに美しく素晴らしい女性であるかが説明されており、これを受けている2・3行目「**ましてくまなき御心の内は、いつしかいかなる御物思ひの種にか**」は、「ましてあまねく女性を求める（院の）好色な御心の内では、早くも（斎宮が）どのような（恋の）物思いの種になっていることか」という意味である。「**くまなき御心の内**（＝あまねく女性を求める院の好色な御心の内）」という言い方は、「院の性格を知り尽くしている」と言え、また、「**いつしかいかなる御物思ひの種にか**（＝早くも斎宮がどのような恋の物思いの種になっていることか）」は、「早くも好色の虫が起こり始めたであろうことを感づいている」からこその発言である。よって、①の説明に誤りはない。

② 8行目「**思ひつることよと、をかしくてあれば**」は、「（やはり）思ったとおりだよと、（私が）おもしろく思っていると」という意味である。作者（二条）が「**をかしく**」思っているのは、①で見た「**ましてくまなき御心の内は、いつしかいかなる御物思ひの種にか**（＝あまねく女性を求める院の好色な御心の内では、早くも斎宮がどのような恋の物思いの種になっていることか）」という予測が当たったことであって、「院があの手この手で斎宮を口説こうとしているのに、世間離れした斎宮には全く通じていない」ことではない。

③ 9行目にある「院」の言葉「**幼くより参りししるしに、このこと申しかなへたらむ、まめやかに心ざしありと思はむ**」は、「幼い頃から（私の側近くに）仕えてきたことの（誠実さの）証明に、このこと［＝斎宮に恋心を抱いていること］を（斎宮に）申し上げて（私の望みを）かなえてくれたら、（おまえに）本当に（私に対する）愛情があると信じよう」という意味であるが、作者（二条）は、この言葉を受けて、18行目「**寝給ひぬるも心やましければ**（＝お休みになってしまわれたのも気がとがめるので）」の箇所では、「院」の使者として、「院」の恋心を伝えるために、「斎宮」のもとへ来ているのである。「院が強引な行動に出かねないことに対する注意を促す」ために、寝かけている「斎宮」に話しかけたわけではない。

④ 20行目「**責めさせ給ふもむつかしければ**」は、「（院が）お責めになるのも（私としては）面倒なので」という意味である。「院」が「**寝たまふらむ所へ導け、導け**（＝斎宮がお休みになっている所へ案内せよ、案内せよ）」とうるさく言うことに対する気持ちを作者（二条）が言っているのである。「**むつかしけれ**」は、「わずらわしい・面倒だ」の意の形容詞「むつかし」の已然形で、「難しい」という意味ではない。つまり、「院」と「斎宮」の「逢瀬の手引き」が「難しい」ことを言っているわけではなく、④の「導く手立てが見つからずに困惑している」という説明は正しくない。「院」を「斎宮」のもとへ連れて行くことが難しいことではないことは、直後に「**御供に参らむことはやすくこそ、しるべして参る**（＝御供をして斎宮のもとへ参るようなことはたやすいことなので、院を案内をして斎宮のもとへ参上する）」とあることからも明らかである。また、作者（二条）は、「院」を「斎宮」のもとへ導いてはいるが、「斎宮を院のもとに導く」ことはしようともしていない。さらに言うと、「逢瀬の手引きをすることに慣れているはずの二条」も本文からは読み取れない。

よって、**正解**は①である。

正解　26　①　（7点）

(iii)

空欄 Z に入る最も適当なものを選べ。　**応用**

空欄の直前の「**【文章Ⅰ】**で」や、次の「生徒C」の発言「あえてそういうふうに書き換えたのか」から考えて、Z には、**【文章Ⅱ】**とは違う**【文章Ⅰ】**での描かれ方の特徴に関する説明が入ることになる。

① **【文章Ⅰ】**に、傍線部A「**つつましき御思ひも薄くやありけむ、なほひたぶるにいぶせくてやみなむは、あかず口惜しと思す**（＝妹に対する恋心を遠慮される御気持ちも薄くなったのだろうか、やはりただただ悶々とした気持ちのまま終わってしまうようなことは、不満で残念だとお思いになる）」や、「二条」を呼び寄せて、「斎宮」の近くへ行きたいと「**せちにまめだちてのたまへ**（＝しきりに本気でおっしゃる）」（傍線部B）という記述があることは、「権威主義的で高圧的な一面を削っている」とは言いがたい。また、傍線部Aの後に「**けしからぬ御本性なりや**（＝よろしくない御性質であるよ）」という、作者（語り手）による、「院」に対する非難めいた評価があることを見ると、「院を理想的な人物として印象づけて、朝廷の権威を保つように配慮している」も正しい説明とは言いがたい。

② **【文章Ⅰ】**では、「二条」のことは「**なにがしの大納言の女、御身近く召し使ふ人、かの斎宮にも、さるべきゆかりありて睦ましく参りなるる**（＝某大納言の娘で、（院の）御身辺近くに仕える者であり、例の斎宮にも、しかるべき縁があって、親しく参上し慣れている者）」と書かれているだけであるから、「三者の関係性を明らかに」しているとは言えず、「複雑に絡み合った三人の恋心を整理している」とも言えない。

③ **【文章Ⅱ】**に書かれている「院」の「**知られじな…**」の歌は「（あなたは）ご存じないでしょうね。たった今拝見した（あなたの）姿がそのまま気にかかって（私の）心から離れなくなったとは」という意味であるので、③はまずこの歌意を「いつかは私になびくことになる」と説明していることが正しくない。また、**【文章Ⅰ】**の「**つつましき御思ひも薄くやありけむ**（＝遠慮される御気持ちも薄くなったのだろうか）」（傍線部A）は、その前に「**御はらからといへど**（＝御兄妹とはいっても）」とあることなどから考えるに、妹に恋慕することが遠慮されるべきことであるから言われているのである（**問2①**の解説参照）。ここで問題にされているのは兄が妹に恋慕することである。「神に仕えた相手との密通」に事件性があり問題であるとは、**【文章Ⅰ】**にも**【文章Ⅱ】**にも書かれていない。

④ **【文章Ⅱ】**に比べると、**【文章Ⅰ】**では、「院の発言を簡略化したり、二条の心情を省略したり」していることは明らかである。また、④が言っ

ている「斎宮の心情」とは、**【文章Ⅰ】**の最後の「**いと心憂しと思せど、あえかに消えまどひなどはし給はず**（＝たいそうつらいとお思いにはなったけれど、弱々しく死にそうなほどにあわてなさるということなどもない）」のことである。このように「斎宮」の心情を描くことで、「院」の側からの一方的な見方に偏ることが薄れるのであるから、④がこれを「当事者全員を俯瞰する立場から出来事の経緯を叙述しようとしている」と説明していることも誤っていない。

よって、**正解**は④である。

正解　27　④　（7点）

第4問　漢文　阮元『揅経室集』

［出　典］

阮元（一七六四～一八四九年）は、中国清代の政治家、考証学者。一七八九年に科挙に合格し、地方官として数々の功績を残すとともに、学者としても著名で、多くの後進も育てた。

［書き下し文］

【序文】

余旧董思翁の自ら詩を書せし扇を蔵するに、「名園」「蝶夢」の句有り。辛未の秋、異蝶の園中に来たる有り。識者知りて太常仙蝶と為し、之を呼べば扇に落つ。継いで復た之を瓜爾佳氏の園中に見る。客に之を呼びて匣に入れ奉じて余の園に帰さんとする者有り。園に至りて之を啓くに及べば、則ち空匣なり。壬申の春、蝶復た余の園の台上に見る。画者祝りて曰はく、「苟しくも我に近づかば、我当に之を図くべし」と。蝶其の袖に落ち、審らかに視ること良久しくして、其の形色を得れば、乃ち従容として翅を鼓ちて去る。園故名無し。是に於いて始めて思翁の詩及び蝶の意を以て之に名づく。秋半ばにして、余使ひを奉じて都を出で、是の園も又た他人に属す。芳叢を回憶すれば、真に夢のごとし。

【詩】

春城の花事小園多く　　幾度か花を看て幾度か歌ふ
花は我が為に開きて我を留め住め　　人は春に随ひて去り春を奈何せん
思翁夢は好くして書扇を遺し　　仙蝶図成りて袖羅を染む
他日誰が家か還た竹を種ゑ　　輿に坐して子猷の過るを許すべき

［通　釈］

【序文】

私は以前董思翁が自ら（自作の）詩を書いた扇を持っていたが、（その中に）「名園」「蝶夢」という句があった。辛未の年（一八一一年）の秋、不思議な蝶が（私の屋敷の）庭園にあらわれた。（その蝶について）知識のある人が見て太常仙蝶だと言い、呼ぶと扇にとまった。続いて再びその蝶を瓜爾佳氏

の庭園で見かけた。それを呼び寄せて（捕まえて）箱に入れ捧げ持って私の庭園に戻そうとした人がいた。私の庭園にやってきてその箱をあけてみると、箱はからっぽで、蝶はいなかった。壬申の年（一八一二年）の春、蝶は再び私の庭園の高殿のあたりにあらわれた。画家が祈るようにして言った、「もし私に近づいてくれたならば、必ずおまえを絵に描いてやろう」と。蝶は画家の袖にとまり、しばらくの間詳しく観察して、その形や色を把握すると、（蝶は）ゆったりと羽をはばたかせて去って行った。（私の）庭園にはもともと名前がなかった。そこではじめて、思翁の（扇面の）詩と（庭園にあらわれた）蝶にちなんで、庭園に名をつけた。（その年の）秋の半ば、私は使者の任をうけたまわって都を離れ、この庭園もまた人の手に渡った。かぐわしく花木の生い茂るその庭園を思い出すと、まことに夢のようである。

【詩】

春の都城には花を愛でながらめぐったりできる小さな庭園がたくさんあって、いくたびも花を見てはいくたびも歌ったものだ。
花は私のために咲いて、たびたび私の足をとどめるが、人は春とともに去り、過ぎ行く春をどうすることもできない。
思翁はよく蝶の夢を見て、その詩を書いた扇を残し、仙蝶は絵になってあや絹の衣の袖を彩っている。
いつの日か（この庭園の持ち主になった）誰かがまた竹を植え、輿に乗ったままの王子猷（のような人物）にその竹を愛でさせて通りすぎさせるのだろうか。

［解　説］

問1　語の意味の問題　(ア)　**基礎**　(イ)　**標準**　(ウ)　**応用**

波線部(ア)「復」・(イ)「審」・(ウ)「得」のここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア)「**復**」は、「**まタ**」で、ズバリ、④「ふたたび」である。「まタ」と読めれば問題ないが、文脈から見ても、ふしぎな蝶を、自分の「園中」で見、ふたたび「瓜爾佳氏の園中」でも見たという流れをつかみたい。

(イ)「**審**」は、「**つまびラカニ**」と読めるかどうかが分かれめである。形容動詞なら「つまびラカナリ」、「つまびラカニス」と読めばサ変動詞になる。「つまびラカニ」は「くわしく」の意で、「詳」も「つまびラカニ」である。「審議（くわしく討議する）」「審査（くわしく調べて適否を決める）」などの熟語の「審」が相当する。

(ウ)「**得**」は、「**う**」（ア・下二段）で、「手に入れる。自分のものにする」「知る。さとる。理解する」「かなう。合う」「満足する。得意になる」など、

辞書的にはいろいろな意味があるが、ここは、袖にとまった蝶をじっくり観察して、その「形色を得」であるから、④の「把握する」が適当である。

正解　(ア) 28 ④　(イ) 29 ②　(ウ) 30 ④　（各4点）

問2　返り点の付け方と書き下し文との組合せ問題　標準

傍線部A「客 有 呼 之 入 匣 奉 帰 余 園 者」について、返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

この形式の問題は、「センター試験」時代から頻出する形式なのであるが、ポイントは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身などの何らかの**句法上の読み方の特徴がないか**ということと、書き下し文のように読んだときの**文意が通るか**、また、**その文意が前後の文脈にあてはまるかどうか**、である。返り点は、本当はそのような返り方（付け方）が文の構成上アリなのか？　ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようについているケースがふつうなので、**返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄**である。

「**客に**」はすべての選択肢が共通している。

また、漢文には非常に多い形で、「**有…者**」は、「**…者有り**（…者がいた）」と読む。この点、①・②・③・④は、文末が「者有り」であるが、⑤だけは違和感がある。

「**之**（これ）」は、蝶であり、「**匣**」はあとに「空匣」があり、（注4＝空の箱）とあるから、蝶を入れた箱である。とすると、

呼 之 入 匣

は、「呼レ之 入レ匣」で、「之を呼びて匣に入れ」と読んで下へ行く。

その下の「奉」も動詞であるから、①のように、「入二匣 奉」（匣に奉じ入るる）」などという返り方はあり得ない。同じ理由で、③のように、「呼二之 入レ匣 奉（匣に入れ呼び奉じて）」と返ることもあり得ない。

特に目立った句法のポイントがないので、右のように少しずつ絞っていくことになるが、書き下し文の文意をチェックしてみて絞ることもできる。

①は、「客で、蝶を呼びよせてはこにうやうやしく持って入れることがあって、私の庭園に帰る者がいた」。

②は、「客で、蝶を呼びよせてはこに入れて持参して返そうとする私の庭園の者がいた」。

③は、「客で、蝶をはこに入れて呼びよせて持参し、私の庭園に帰る者がいた」。

④は、「客で、蝶を呼びよせてはこに入れ持参して私の庭園に返そうとする者がいた」。
⑤は、「客で、蝶を呼びよせることがあってはこに入れ、私の庭園の者に返すことを奉じる」。
①・②・③・⑤は•••（傍点）の部分の文意がおかしい。
②は、「客」イコール「私の庭園の者」になってしまっているし、③は、「客」が「私の庭園に帰る者」であるのが変である。⑤は、支離滅裂である。

正解　31　④　（7点）

問3　傍線部の解釈の問題　標準

傍線部B「苟 近レ我、我 当レ図レ之」の解釈として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。

傍線部「**苟 近レ我、我 当レ図レ之**」には、ポイントが二つある。
一つは、文頭の「**苟**」で、これは、「**いやシクモ…バ**」と読み、「かりにも…（なら）ば」と訳す、**仮定形**である。
もう一つは、後半の「**当**」で、これは、「**まさニ…（ス）ベシ**」と読み、基本的には、「当然…すべきだ。…しなければならない」、あるいは、同じ読み方をする「応」と同じように、「きっと…だろう」と訳す、**再読文字**である。
「苟」のポイントからは、ズバリ⑤の「もしも…ならば」がよい。④の「もし…」もよいが、「…としても」との呼応では意味がズレる。
「当」のポイントからは、②の後半が合っているように見えるが、②は前半部が間違っている。
読み方は、「**苟(いや)しくも我に近づかば、我当(まさ)に之(これ)を図(はか)くべし**」。
後半は、直訳すれば、「私は当然おまえを絵に描くべきだ」か、「私はきっとおまえを絵に描くであろう」であるが、⑤の後半のように訳しても許容範囲であろう。
①・②・③・④の前半がすべて×で、①・③・④の後半は×であるから、⑤しかない。

正解　32　⑤　（7点）

問4　漢詩のきまり（押韻・形式名）の問題　基礎

空欄 X に入る漢字と【詩】に関する説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。

漢詩の**偶数句末の空欄補入問題は、「押韻（おういん）」の問題であることに**、すぐ気がつかなければならない。

もう一つ、この詩が、一句が七文字、全部で八句の「**七言律詩（しちごんりつし）**」であることも、漢文学習上の常識である。「絶句」は四句の詩。「古詩」は、短いケースもあるが、教科書で見かけるものとしては、白居易の「長恨歌（ちょうごんか）」「売炭翁（ばいたんおう）」や、杜甫の「石壕吏（せきごうのり）」のような、長い詩である。

- 五言の詩……偶数句末で押韻する。
- 七言の詩……第一句末と偶数句末で押韻する。

「押韻」とは、決められた位置の字のひびきをそろえることをいう。

X は、第二句めの末尾であるから、その他の位置の字を音よみしてみる。

第一句末「多」（タ・ta）
第四句末「何」（カ・ka）
第六句末「羅」（ラ・ra）
第八句末「過」（カ・ka）

次に、選択肢に並んでいる字を音よみしてみる。

① 「座」（ザ・za）
② 「舞」（ブ・bu）
③ 「歌」（カ・ka）
④ 「少」（ショウ・shou）
⑤ 「香」（コウ・kou）

「ア（a）」というひびきで合っているのは、①「座」か、③「歌」であるが、①は「七言絶句」が間違っている。

「七言律詩」が合っているのは、③か⑤であるが、⑤は「香」が「コウ」で間違っている。「香」を「か」と読むのは訓よみである。

正解　33　③　（5点）

問5　傍線部の読み方の問題　基礎

傍線部C「奈レ春 何」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

明らかに、**「型にはまった」句法の問題**である。

「奈何」は「如何」と同じで、「いかんセン」と読むが、目的語をとる場合は、

如レA ヲ何セン　　読 Aヲいかんセン

（奈）　　訳 Aをどうしたらよいか〔疑問〕

Aをどうしたらよかろうか（どうしようもない）〔反語〕

という形になり、方法・手段を問う。

よって、「奈レ春 何」は、「はるをいかんせん」で、⑤である。

正解　34　⑤　（5点）

問6　文脈のとらえ方の問題　応用

【詩】と**【序文】**に描かれた一連の出来事のなかで、二重傍線部Ⅰ「太 常 仙 蝶」・Ⅱ「仙 蝶」が現れたり、とまったりした場所はどこか。それらのうちの三箇所を、現れたりとまったりした順に挙げたものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「大学入学共通テスト」に切りかわっての新傾向と言うほどではないが、珍しい形の問題である。

「太常仙蝶」「仙蝶」が、現れたり、とまったりした場面を、順をたどって見ていく。

a.「辛未の秋、異蝶の園中に来たる有り」……**阮元の家の庭園**

a'.「之を呼べば扇に落つ」……**「扇」にとまる**

b.「復た之を瓜爾佳氏の園中に見る」……**瓜爾佳氏の庭園**

c.「壬申の春、蝶復た余の園の台上に見る」……**阮元の庭園の台**

c'.「蝶其の袖に落ち」……**「袖」にとまる**

時制的には、aとa'、cとc'は同じ時のことであるから、「現れた」点では、a→b→c、「とまった」のは、a'→c'である。
①・②のように、詩の中の「春の城」は関係ない。①は右のc'とbの順も違っており、②は「画家の家」も間違っている。
③は、「董思翁の家」も「画家の家」も間違い。
④は、a'とbの順が間違っている。

正解　35　⑤　（6点）

問7　本文全体から読み取れる筆者の心情説明の問題　応用

【詩】と【序文】から読み取れる筆者の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

【序文】では、ふしぎな「蝶」の出来事のあと、「芳叢を回憶すれば、真に夢のごとし」と言っている点に心情が表れている。
【詩】のほうは、なかなか正確な解釈が難しい。
しかし、要は、与えられた**問題文と選択肢との内容合致問題**であり、選択肢の中のキズを見つけて消去していく。

① 毎年花が散り季節が過ぎゆくことにはかなさを感じ、×董思翁の家や瓜爾佳氏の園に現れた×美しい蝶（ちょう）が扇や絵とともに他人のものとなったことをむなしく思っている。
② ×扇から抜け出し庭園に現れた不思議な蝶の美しさに感動し、×いずれは箱のなかにとらえて絵に描きたいと考えていたが、それもかなわぬ夢となってしまったことを残念に思っている。
③ 春の庭園の美しさを×詩にできたことに満足するとともに、×董思翁の夢を扇に描き、×珍しい蝶の模様をあしらった服ができあがったことを喜んでいる。
④ 不思議な蝶のいる△夢のように美しい庭園に住んでいたが、×都を離れているあいだに人に奪われてしまい、×厳しい現実と美しい夢のような世界との違いを嘆いている。
⑤ 時として庭園に現れる珍しい蝶は、○捕まえようとしても捕まえられない不思議な蝶であったが、○その蝶が現れた庭園で過ごしたことを懐かしく思い出している。

①～④には、明らかに大きなキズがある。

正解

36

⑤

（8点）